

中海・宍道湖漁業振興対策事業

ハクレン親魚養成試験

鈴木博也

本種はコイ科の魚で原産地はアジア大陸東部、北限は黒竜江、南限は華南またはベトナムとされている。日本へは草魚と共に移入され、既に利根川では多数の繁殖が認められているが、近年では茨城県霞ヶ浦でも大量に漁獲されるようになっている。

当分場では中海、宍道湖の淡水化後の魚種転換対策として、昭和59年9月に埼玉県水産試験場から稚魚を移入して以来、今日まで引続き養成試験を実施しているので、本年度の概要を簡単に報告する。

材 料 と 方 法

1. 飼 育 魚

前年度から継続して飼育していた魚。

2. 飼 育 池

282㎡の亀甲型の池（側壁はコンクリート、池底は泥、排水口側に約2坪の魚留りがある）1個で飼育した。水深は約0.7mで止水にした。

3. 給 餌

配合飼料は日本農産KK製ニューカープマッシュで、原則として、4～11月は1日当たり4～5kgを4～5回に分けて、粉末のまま給与した。その他の時期では1～2月はあまり給与しなかったが、天候の良い日は同様な方法で給与した。

4. 魚体測定

飼育魚は池から全部捕揚げて、その中から50尾を無作為に抽出して固定せずにそのまま測定した。

結 果 と 考 察

1. 飼育と摂餌状況

飼育池は植物性プランクトンの繁殖を促進するため止水にしたので、池水は緑藻類、藍藻類などにより緑色を呈したが、時には水変りがみられ、水色が一時的に薄くなるか、消失することがあった。飼育池の表面水温は約30°C～2°Cの範囲で変動したが、夏期は河川水より2～3°C高く、冬期は池の表面が結氷する日もあり、逆に河川水より2～3°C低く推移した。

飼育期間中の60年7月14日夜、豪雨により三刀屋川が増水して排水ゲートから侵水し、飼育池が一時的に冠水して一部の魚が逸散した。その後は大量斃死は発生せず、特に異常は認められなかった。

配合飼料は粉末のまま給与したので、飼育魚は水面に浮いている粉末を水面まで浮上して群がって吸い込むように摂餌した。しかし、粉末の殆んどは池水に溶けるため飼料効率は極めて悪いと考えられた。今後は本種の食餌上の特性から飼育池の植物プランクトンを積極的に増殖し、水作りを充分にして飼育する必要がある。

2. 成長状況

飼育魚は、昭和59年9月18日の移入時には全長8cm、体重10gであったが、1年後の60年9月19日には体長22.8cm、24.0cm体重は101.3～151.0gであった。体長では約3倍、体重では約10～15倍に成長した。その後の3年を経過した昭和63年1月22日には平均体重は303.2gで約2倍に成長していたが、平均体長は24.79cmで1年後とあまり変わらず本種の体型的特色を示していると考えられる。飼育魚の成長を表1に示した。

要 約

表1 飼育魚の成長

項 目	59. 9. 18	60. 9. 19	63. 1. 22	備 考
水産試験場からハクレンの稚魚1,000尾（平均体長8cm、平均体重10g）を移入して、引続き養成試験を実施した。止水池でコイ用配合飼料の粉末を給与した。	BL 8	22.8 ～24.0	24.8 ± 1.4	59. 9. 18 1,000尾
	BW 10	101.3 ～151.0	303.2 ± 45.6	62. 1. 22 422尾
BL (cm) , BW (g) , $\bar{x} \pm SD$			DATA VOL 50	

2. 昭和63年1月22日現在、平均体長24.79cm、平均体重303.2gに成長して、442尾を飼育している。昭和61年7月21日夜、豪雨があり、飼育池が一時的に冠水して一部の魚が逸散した。